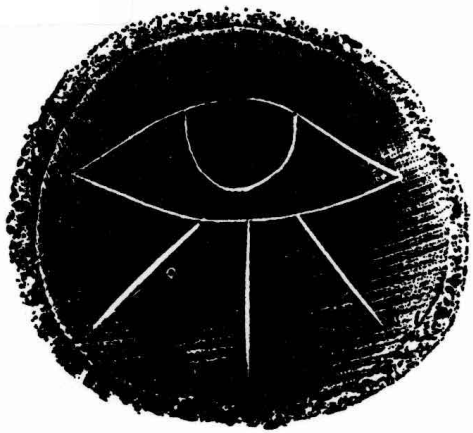
埋もれた遺書

―日本の母たち―

畑山博

埋もれた遺書 —日本の母たち—

畑山 博



潮出版社

埋もれた遺書

昭和五十二年十一月　五　日　印刷
昭和五十二年十一月　十五　日　発行

著　者　畑　山　博

発行者　富　岡　勇　吉

発行所　株式会社　潮　出　版　社

東京都千代田区飯田橋三―一―三
電話　東京(03)230〇七四一(販売部)
230〇七八一(編集部)
振替　東京五―六　一〇九〇
郵便番号一〇二

(乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします)

印刷　第一印刷株式会社　　製本　株式会社鈴木製本所

©一九七七
検印廃止

埋もれた遺書／目次

I 北辺の大地に生きる

小樽漁港・サンダカダの女……9
女たちのために男は生きた／氷海に消えた夫／夫を亡くした女たちの祭り

囚人道路・鎖塚を守る女……31
赤い腰巻きの囚人たち／少女と鉄鎖／留辺蘂の谷間で／女たちの血の中のシャーマン

農民闘争・ハチスカの女……53
私たちは未だ中世の終章にいる／農民たちにとっての明治維新／蜂須賀農場の冬／雪の下の学校／空知の新しき封建制度／麦粉の糊を乳代わりに

II 重い性の鎖

埋もれた遺書・ある娼婦の一生……81
真夏の夜に咲いた夢／名代娘のただ一人／沈黙の肉体／かぎりなく優しき地平／母としての娼婦

哀しき性の淵から・若き秩父路の母……107
盆地に生まれて／異常な結婚生活／人生の坂道

III 戦火の中から羽ばたいた日々

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

炎の中の子守唄・下町本所の母……125
子守唄代わりに聞いた父の話／大空襲で父母は帰らぬ人に／今は咲ききった夕顔のごとく
敗戦の満州・極限を生きた母たち……141
北満州千振開拓団／荒野の花嫁たち／鉄橋からわが子を捨てて／乳房なき胸／慟哭の大地／しかも生まれくる子たち／新しき大地に祈る

Ⅳ このいのちの果てに

忘れられた時間の中で……177
パラソルをさした老女／孤独や病気とおにごっこ／チマンゴのような隣人／枕もとに吹きこむ雨／福祉によって汚されるもの
孤独な母たちへのレクレエム……197
とうがらし入れを盗む女／ある日突然老いる／鴉の羽をむしる女
ある安楽死願望……213
脳軟化症の夫を抱えて／一通の手紙もなき三十六年間／安楽死法への叫び／このぎりぎりの知性
あとがき　233
著作目録（近作）

裝幀　司　修

埋もれた遺書

——日本の母たち——

I　北辺の大地に生きる

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

小樽漁港・サンダカダの女

女たちのために男は生きた

サンダカダというのは、食いつめた東北や北陸の男たちが、日本海の荒海を越えて北海道へ出稼ぎに行くときに乗った、小さな手漕ぎのぼろ船のことである。

浜辺の漁民の男たちは、中世という時代の重石の下を生きてきても、なおたくましかった。寒風に吹きさらしの隙間だらけの杉板の家。板屋根に石をのせた小屋のように小さな家の中で、ヒエ飯を食い、くず米の粥をすすり、己が獲った魚を食うこともままならず、はらわたを食い、しかもなお女たちのために頑丈な腕の力を萎えさせまいとして生き継いできた。

そのたくましい男たちが、両腕を左右に力いっぱい伸ばしたときの長さを一尋（ひろ）と言う。十数日

もの不毛な漁からの帰還。浜辺にごうごうと火をたいて待つ妻たちに向かって、男たちは、船がまだ浜砂に押し上げぬ先から海に下り、駈け寄ってゆく。そうしてそれぞれに己の妻を力いっぱい抱きしめようとするそのときの腕の長さである。

四尋というからそれが四人分。帆はなく四人分の艪で漕ぐ船のことを、いつのころからか人びとはサンダカダと呼ぶようになった。

が、苛酷な暮らしの日々の中にも、そんな野性の詩をもつうちは、漁民らはまだ幸せであったのかもしれない。表の歴史が中世の終わりを告げ、文明開化とか近代の到来を告げる裏で、零細な漁民たちは、しだいに己の漁場を失なわねばならない事態に直面していった。

高性能の新造漁船による合理化と資本の統合によって、近海では乱獲がはじまり、さらにどしどしと遠洋に乗り出してゆくというのが時代の趨勢だった。

時代に乗り遅れた漁民たちは、乱獲のため荒らしつくされた漁場を棄て、あるいは追われ、新天地を求めて北海道へ旅立って行った。

それはまた近代という倒錯した流通機構の中で、自分たちの作った米は食えずにそれを売り、安価な台湾米を買って食うといった類の現象が頻発しはじめた農村や、町場についても言えることだった。

乞食のような身なりをした食いつめ者たちの群れが街道を往来し、浜で出発の準備をしている

サンダカダの男たちに同乗を乞うのだった。
サンダカダに同乗を乞う者たちの中には、なぜか女たちが多かった。紡績工場から逃れて行こうとする者、娼婦の街から逃れ出ようとする者、百姓女。さまざまな女たちが、サンダカダに乗りこんだ。
浜辺にとまっているぼろ船に近づいて行って、
「ぶせっけてくれ（仲間にして乗せていってくれ）」
と話しかけるのが、女たちのするアプローチの第一歩であった。
そうして最下層の男たちによる最下層の女たちの品定めが行なわれ、意気投合すれば、女たちは、背負っていたかまど道具を船に積む。
幾組もの男たち女たちが、そうやって荒海の上で夫婦になった。
船は、潮の流れを見ては磯に待避し、また進みしながら、例えば秋田のあたりから出発しても小樽へ着くまで半月以上もかかった。
途中、しけない日の方が少ない津軽海峡西端の西津軽堆を越え、松前と小島の間の水道を抜け、奥尻島を西に見ながら尾花岬を越え、積丹の神威岬を越すと、ようやく目的地の石狩湾であった。
〝おしょろ高島お呼びもないが……〟
と江差追分けにも歌われている神威岬を越えるとき、男たちは何に向かって隠すのか、同乗の

女たちを船底に腹這わせ隠し、「おう。おう。おう」と雄叫びをあげた。

そんなぼろ船の漂着を、大正十二年、箕輪タヨさんの十歳のころまでは、よく浜辺で目撃することが出来た。

箕輪タヨ。大正二年九月生まれ。彼女の親たちもまたそうやってサンダカダで渡ってきた漂着者たちの一人である。

漂着した男たちは、その土地の親方（網元）の娘をもらい、船持ちの株を分けてもらうことを唯一の夢として、みな必死に働らいた。

そのころ北海道近海では、ニシンでもマスでも海水の色が見えなくなってしまうほどに豊かに回遊していた。働らけば働らくだけ稼ぎになるのであった。男たちは、獲物を秤にかけるひまさえなかった。畳二帖分もある大升へ船から直接獲物を放りこみ、目分量で一升、二升と計ったのである。

漂着した人びとを待ち受けている暮らしには好運の訪れもあったが災厄もあった。けっきょくのところ棄ててきた故郷の方がまだよかったのだと言って引き返して行ってしまう一家もあった。

箕輪タヨさんは二歳のとき、同じ浜の子のない夫婦（箕輪家）へ里子に出された。浜の漁師暮らしは、もらわれて行った家の方でもやはり同じように苦しかった。

八歳ぐらいになるともう家の手伝いのために行商に出なければならなかった。浜の男たちが獲

ってきた魚と家で作っていた二反の畑から穫れる大根を籠に入れて、四キロ離れた小樽の町場まで担いで行って売るのである。

正月も学校へ行くときもはく同じ一足きりの子ども用の地下足袋をはいて、小樽の町の賑わいの中を売り歩いた。天秤棒で担ぎ売りをしていると、しゃがんで前の籠の分を売っている間に後の籠の分を盗んで行かれたりして哀しかった。

十一歳になると子守り。あいかわらずの行商。十四になるとようやく浜の網元など大勢の使用人のいるところで、ママ炊きとして使ってもらうことが出来る。で、彼女もそのママ炊きになった。何十人もいる男たちのための炊事、洗濯仕事で追い回された。漁期には、男たちはほとんど眠らずに働らいた。それだから女たちもまたそうしなければならなかった。

早熟な女たちは、やがてたくましくいろいろなことを知り、狭い浜から羽ばたいてゆく。十八歳のとき、彼女もまたとつぜん流氷のオホーツク、北見紋別に働らき口を変える。

そうしてそこに二年。二十歳のときにはさらにオホーツク岸を南下して、知床半島の根元斜里で、帆立て貝引きの労働をした。

二十二歳。久しぶりに帰った小樽の浜で彼女は結婚した。相手は新潟県の直江津から出稼ぎにきていた青年。無口だがたくましい筋肉をもった働らき者だった。その青年を入り婿の形で家に入れた。

氷海に消えた夫

男たちは、くる日もくる日も海の上である。少し風の強い日には、極端にパワーが落ちてしまう四〇トンほどのエンジンつき漁船では、せいぜいが天売島沖合いあたりまで遠征するのが精いっぱいだった。

短い夏の漁期の間を惜しんで男たちは働らいた。

いや、冬になってもそれは同じだった。もっと資本の規模が大きく優秀な船を揃えている網元たちが操業を見合わせる荒波の日や雪の日こそ、弱小の漁民たちは、漁のチャンスなのだと信じていた。舟べりもマストもつららでがちがちにして、浜の男たちは天売の漁場から帰ってきた。

一航海が最低半月。嵐の日ほど漁はあった。男たちの乗った船は、たいてい日が落ちてから激しく汽笛を鳴らして浜に帰ってきた。

すると、浜の女たちも年寄りも子どもも総出の水揚げ。水揚げが終わると、妻たちの幾人かは夫とともに熱い火のある家へそっと戻って鍵をかけた。けれども、そうして家に帰る男たちは、仮眠すらとることも出来ない。女たち、年寄りたち、子どもたちが寄ってたかって補給物資を積みこんだ漁船へ、二、三時間後にはもう戻らなければならないのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com